

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04445

研究課題名(和文)助産師と考える妊産褥婦への心理的アプローチ

研究課題名(英文) Psychological approach to pregnant and parturient women made by clinical psychologists in cooperation with midwives

研究代表者

河野 千佳 (KONO, Chika)

日本大学・文理学部・准教授

研究者番号：90348433

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：質問紙調査と描画法を用いて、妊産褥婦の心理的特徴を明らかにした。助産師・保健師への面接から、いわゆるグレーゾーンの“気になる”妊産褥婦には自己中心性・依存性の高さ・情緒の不安定さ・未熟さという特徴が認められた。これは妊産褥婦の自我の脆弱さにより、それによってネガティブな感情が生じやすく、対処困難に陥ることでパニックになり不適応を生じることが予測された。さらに助産師らは、情緒の不安定さ等を抱える「気になる」褥婦に対応しきれず、不全感を抱えていることが明らかとなった。妊娠期から母親たちと関係性を構築するために助産師と連携し、生活の場でのサポートすることが必要という方向性が見いだされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

妊産褥婦の自我の脆弱性や自身の問題への無自覚さが育児困難感を引き起こし、心理的な「育てにくさ」の本質につながるのではないかと考えられる。助産師や保健師が感じている対応の困難さが妊産褥婦の自我の脆弱性によるものであれば、育てにくさを抱えた今の妊産褥婦の心理的様相を心理職が看護職とともに明らかにして関わることで、母子関係の始まる大事な時期から愛着を基盤とした対人関係を母子ともに安定して築けるように援助できる。このことは助産師・保健師による周産期支援に還元できるだけにとどまらず、妊娠前の青年期女性に対する心理教育にもつなげていけるものと期待できる。

研究成果の概要(英文)：In this study, the psychological characteristics of pregnant and puerperal women were investigated using a questionnaire survey and the colored circle drawing method for families. Semi-structured and group interviews with midwives and public health nurses revealed that pregnant and puerperal women in the gray zone (defined as those who were anxious in some way though not abnormal) exhibited self-centeredness, dependence, emotional instability, and immature personality. Ego-weakness was expected to lead to maladaptive coping, negative emotions, inability to handle these emotions, and panic. There is a need for psychologists to cooperate with midwives to build relationship with pregnant and puerperal women in order to provide support in their daily lives.

研究分野：臨床心理学

キーワード：臨床心理学 母性心理学 対児感情 母子画 助産師 インタビュー 連携 協働

1. 研究開始当初の背景

超少子社会、核家族、対人関係の希薄化、女性の社会進出などによる育児を取り巻く社会環境の変化により、多くの女性は育児モデルを学習する機会を持たず、母性を育成させる経験もなく母親にならなければならない。そのため、妊娠・出産・育児を経験していく過程で、自身の役割の変化や身体的・心理的变化に戸惑うケースも少なくない。妊娠・出産は母子関係の始まりという大変重要な時期であり、子育て支援に関する地域支援ネットワークを構築する試みも始まっている(星野ら, 2014)。しかし産後うつ病のスクリーニングの問題点が指摘されており、効果的な支援のためには母親が気持ちを表出しやすい評価方法が求められている(木村ら, 2014)。Wada et al. (2009) は助産師・保健師へのインタビュー調査から、周産期の母親たちの中につ病など明らかな心理的問題があるとは言えないものの、このまま「支援の必要なし」としていいのが「気になる」グレーゾーンの母親が増えている、と報告している。そこで現在の妊産褥婦の心理的特徴を明らかにするため、河野ら(2014)は、20年前の妊婦445名・褥婦252名と現在の妊婦162名・褥婦344名の不安やマタニティ・ブルーズ傾向等を比較した。その結果、現在の妊婦・褥婦のほうが妊娠中の不安は高く、出産後には自分は頑張ったという自己評価が高いものの情緒の不安定さを示していたことを見出した。さらに、現在の褥婦は、分娩体験を我が子への想いや母になるための頑張りにとらえる一方で、我が子であるという実感のなさや喪失感を報告し、頑張りとお感のなさという両価的な評価をしていた(河野ら, 2013)。この妊産褥婦の両価的な自己評価は、助産師・保健師が気になると評する母親たちの特徴に関連していると考えられる。Wada et al. (2016) が助産師・保健師・看護師といった医療職者を対象に行った質問紙調査では、メンタル面に問題があると思われるケースへの対応の難しさとともに意思表示が乏しく依存傾向が強い、あるいは要求やこだわりの強い、関心が低い妊産褥婦への対応に苦慮している実態が明らかにされている。このグレーゾーンと言われるような妊産褥婦をハイリスク(重大な予後が予想される)妊産褥婦にしないためにも、妊産褥婦の誰もが心理的問題を抱える可能性があるものとして援助する必要がある。両価的な自己評価は自己不全感とも関連しており、これは子どもへの感情にも影響すると考えられる。褥婦と女子大学生を対象にした愛着スタイルと対児感情(子どもに対する感情)の研究では、安定した(他者は信頼できる存在であり、自己は価値ある存在である)IWMは、子どもに対して肯定的で受容する接近感情に強く影響し、アンビバレント(両価的)な(他者に対して信頼と不信の相反する2つの表象を持ち、自己不全感が強い)IWMは、子どもに対して否定的で拒否する回避感情と関連することを明らかにした(河野ら, 2015)。

さらに対象者の無意識的な側面からも関係の構築を明らかにするために行った、投映法的手法として母子画(Mother-and-Child Drawings)を用いた研究では、女子大学生と妊産褥婦を比較して、妊婦・褥婦による母子画の特徴として母子像が密着しており、対象との関係が近く、焦点化し凝縮された精神面を反映していたことを報告した(Kohno, 2016, 櫻井ら, 2014)。さらに妊婦・褥婦の描く母子画のケーススタディから体調状態や感情状態の不調、マタニティ・ブルーズ傾向が、母子画の母子像の形態や身体接触場面に現れていたことを報告した(櫻井ら 2015a, 櫻井ら 2015b)。

2. 研究の目的

妊産褥婦の自己評価の高さとともに情緒の不安定さを訴えるという両価的な心理状態の“気になる”妊産褥婦を見つけだし、周産期支援、さらに子育て支援につなげていくことは急務である。それには臨床心理士がリエゾンとしての役割を担うことで支援に役立つものと考えられる。

そこで本研究では妊婦・褥婦の子どもに対する感情を明らかにし、質問紙調査と描画法検査によって明らかになった特徴と、妊娠・出産に対する自己評価や子どもへの想いを面接によって聴き取ることで、妊産褥婦の両価的な認知や情動といった心理状態を把握し、助産師とともに妊産褥婦ひとりひとりの両価的自己評価の要因を丁寧に拾い上げ、褥婦が生活地域に戻った際にかかわる保健師をはじめとした母子保健従事者へとつなげることを目的とする。そのために

- (1) 妊産褥婦の自己評価や情緒、取り巻く環境を面接・描画法・質問紙調査により明らかにする。
- (2) 妊産褥婦にかかわる専門家である助産師・保健師が、妊産褥婦の外来・病棟での様子や出産して退院後の健診、保健センターが実施している家庭訪問時に感じている母親たちの様子など、現代の妊産褥婦の特徴について明らかにする。
- (3) (1)(2)で明らかとなったことをもとに、臨床心理士・助産師・保健師でディスカッションを行い、グレーゾーンと判断された妊産褥婦へのかかわり方の方向性を見出す。

3. 研究の方法

- (1) 妊産褥婦の妊娠期の不安や出産の振り返りの自己評価や対児感情、情緒を調べるために、質問紙調査・描画法テスト(色彩円環家族イメージ画)・面接を行った。

(2) 実際に助産の臨床現場で妊産褥婦に関わっている助産師や家庭訪問等で褥婦に関わっている保健師を対象に、妊産褥婦の外來・病棟での様子や出産して退院後の健診、保健センターが実施している家庭訪問時の母親たちの様子などから、半構造化面接を行い、現代の妊産褥婦の特徴や助産師・保健師の対応の困難感や工夫について聴き取りを行った。

(3) (1)(2)でさらにこれまでの母性心理学研究で明らかにしてきたことをもとに、臨床心理士・助産師・保健師が集まってディスカッションを行い、対応が困難であったと感じた事例をも出し合いながら、グレーゾーンと判断された妊産褥婦へのかかわり方の方向性について話し合った。

4. 研究成果

(1) 質問紙調査・描画法等から見た妊産褥婦の特徴

対児感情評定

妊産褥婦を取り巻く環境は時間的経過の中で著しい変貌をとげている。子どもに対する感情を評定する形容詞項目においても、時代により捉え方に差が生じているのではないかと考えられる。そこで1990年代初頭に産科外來と産科病棟にて妊産褥婦(初産婦295名 経産婦242名)に実施した対児感情評定のデータと、現在の妊産褥婦(初産婦453名 経産婦426名)ならびに子どもを持っていない青年期・成人期の未婚女性(883名)にそれぞれ実施した対児感情評定のデータを分析した。その結果、属性の違いにかかわらず、児への接近感情を評定しうる項目と回避感情を評定しうる項目を抽出することができた。このことは接近感情と回避感情には普遍的なものがあると言える。しかしその一方で時代の変遷や対象によって使われ方が異なったり使い手が考える意味にずれが生じたりするものも出てきていた。そこでよわよわしい、いじらしいなど意味にずれが生じていた形容詞を外して整理して、18項目の形容詞(接近感情を表すたのしい、いとおいしい、うれしいなどの9項目と回避感情を表すめんどくさい、わずらわしい、うっとうしいなど9項目)を用いることで、妊産褥婦や青年期成人期の対児感情評定をより明確にすることができることが明らかとなった(河野ら, 2017)。これを色彩円環家族イメージ画と一緒に用いて、母親が意識化している児に関する感情を測定するために使用した。

色彩円環家族イメージ画

描画法の1種である色彩円環家族イメージ画を用いて事例研究では妊産褥婦の心理面の把握を容易にし、心理的援助に有効である可能性が示された(櫻井ら, 2017)。色彩円環家族イメージ画は円環イメージ画をもとにしており、円環イメージ画は母子関係が絵に表出される描画法である。円環イメージ画は円の包摂や大きさが指標となっており、包摂は母子の関係性、大きさは存在の大きさをあらわす。色彩円環家族イメージ画は円環イメージ画に感情の表出を促す色彩を加え、妊産褥婦を対象に母と児のイメージ円を描くもので、包摂(図1)・大きさ・描線・色塗り・色を指標とする。色彩円環家族イメージ画においても、包摂に描画を描いた時点の心理面が反映されることがわかっている。描画法では描線に対象者の意識が表出され、色に感情が表出される。そこで、妊娠期に描いた色彩円環家族イメージ画の特徴と産後1か月・3か月の産後うつつの指標であるEPDS(日本版エジンバラ産後うつ病自己評価表)による数値との関連について49名の縦断的なデータから調べたところ、妊娠期に産後イメージを持つ人のほうが画を描いた時点での状態を描いた人よりも産後うつ傾向が高いことが明らかとなった。また、円を小さく描いた妊婦は大きく描いた妊婦より産後うつ傾向が高いことが明らかとなった(櫻井ら 2018)。さらに妊婦30名を対象にした描画と描画後のインタビュー内容の分析からは、妊婦の多くは母と児を内包・内接や交錯している関係性で表し、実際の自身の妊娠経過を表現していることも明らかとなった。さらに児と母を表す色は暖色が多く使用され、温かさや幸福の感情を表していた(和田ら, 2018)。一方、褥婦の多くは、母と児を交錯や外接の関係性で表しており、33名の描画後のインタビュー内容の分析からは出産を

経験した自身の現在の様子を表現していた(和田ら, 2019)。さらに描線の形態と心理的指標との関係からは、産褥早期の時点において円を1本線で描く褥婦は複数線で描いたり、色塗りする褥婦よりも活気・活力・友好気分が低い傾向にあることが示され、描画の形態と心理的指標との関連が見いだされた(櫻井ら, 2019, 櫻井ら, 2020, 図2)。さらに幼児を持つ母親33名に色彩円環家族イメージ画を実施したところ、包摂は外接や分離で表現され、描線の形態も母子を同じ表現で描かれているものが多く(和田ら, 2021)。妊娠期・産褥早期・育児(幼児)期それぞれの時期の母子の関係性や母親の感情が円環家族イメージ画に表されることが明らかとなった。このことから、産科臨床において母子関係を把握するために円環家族イメージ画が有効であることが言えよう。

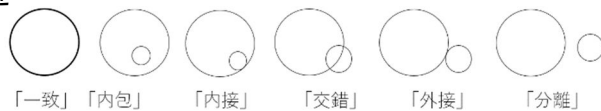
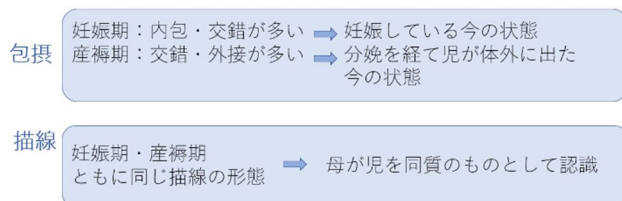


図1 円の包摂：2つのイメージ円の位置関係



妊娠・産褥期の母からみた児との心理的距離や母の意識・感情をあらわしている

図2 色彩円環家族イメージ画における妊娠期産褥期の特徴

(2) 助産師・保健師から見た妊産褥婦の特徴

周産期医療現場や健診、家庭訪問事業による指導現場等で妊婦・褥婦にかかわっているあるいはかかわった経験を持つ助産師ならび保健師に、研究の趣旨と目的、方法および倫理的配慮についての説明を行い、協力の依頼し同意を得たうえで半構造化面接を行った。その内容は助産師・保健師としての臨床歴と仕事内容、周産期現場で働き始めたころの周産期臨床と現在とで変わったと感じること、同じだと感じること、現在の周産期医療現場で妊産褥婦の心理について気になることについて、45分～90分程度、1回に1名ないし2名を対象とした。その内容は同意を得たうえでICレコーダーに録音した。分析方法は、録音データから逐語録を作成し、研究者間で繰り返し読み、妊婦・褥婦の心理的特徴についての文脈に着目し、最小単位の意味内容を抽出した。抽出された意味内容を要約してコード化し、意味内容の類似性に基づいて集約し、分類してカテゴリーを生成した。カテゴリー化に際し、研究者間で一致が見られるまで検討、討議を行い、信頼性を確保した。協力者は、4年～30年以上の周産期医療の臨床経験や母子保健指導経験を持つ助産師6名(20代後半～60代)と、10年から30年以上の母子保健指導の現場経験を持つ保健師5名(30代～60代)の計11名であった。

助産師、保健師それぞれの面接の内容を分析した結果、妊婦について、助産師が語った妊婦の心理的特徴としては【見よりも自分という自己中心性】【依存性の高さ】【情緒の不安定さ】の3カテゴリーが生成された。一方、保健師が語った妊婦の心理的特徴としては【受容しきれない妊娠】【心理社会的未熟さにより親になる困難さ】

【想像していた妊婦像と違う自分】【情緒の不安定さ】の4カテゴリーが生成された。褥婦について、助産師が語った褥婦の心理的特徴としては【背景の多様さ】【見より自分という自己中心性】【産後の生活に不適応】【情報を処理しきれず助長される不安】【要支援にもかかわらず無自覚】の5カテゴリーが生成された。一方、保健師が語った褥婦の心理的特徴としては【背景の多様化】【保健師との距離の取り方の不安定さ】【インターネット情報への依存】【情報を処理しきれず助長される不安】【相談機関への抵抗感】【育児経験や育児能力の不足】【緩和されない次々に出現する不安】【産後の生活を思い通りにしようとする固着】【対応できない予想外の育児】【現実の育児に対応しきれずパニック】の10カテゴリーが生成された(表1)。

助産師・保健師が語った褥婦の心理的特徴としては【背景の多様化】【保健師との距離の取り方の不安定さ】【インターネット情報への依存】【情報を処理しきれず助長される不安】【相談機関への抵抗感】【育児経験や育児能力の不足】【緩和されない次々に出現する不安】【産後の生活を思い通りにしようとする固着】【対応できない予想外の育児】【現実の育児に対応しきれずパニック】の10カテゴリーが生成された(表1)。

助産師・保健師からみた妊婦については、心理面の不安定さ、自己中心性、未成熟さ、依存性の高さなどをとらえており、両者に共通しているカテゴリーは情緒の不安定さであった。一方、褥婦については助産師・保健師ともに背景の多様化をあげており、さらに情報を求めてインターネット上にアクセスするが、その情報量の多さに情報を処理しきれずに、かえって不安を助長させている褥婦の様子が浮かび上がってきた。また援助が必要なのに自覚がないことや相談行動がとれない、産後の新たな生活に対応できず、それまでの生活に固着し、育児が思い通りにならない状況に対応しきれずに褥婦自身が自分ではコントロールできない一種のパニック状態にある(図3)と、助産師、保健師ともにとらえていたことが明らかとなった(河野ら, 2019)。

表1 助産師・保健師がとらえている妊婦・褥婦の心理的特徴のカテゴリー

	助産師	保健師
妊婦	見よりも自分という自己中心性	受容しきれない妊娠
	依存性の高さ	心理社会的未熟さにより親になる困難さ
	情緒の不安定さ	想像していた妊婦像と違う自己的情绪の不安定さ
褥婦	背景の多様さ	背景の多様化
	見より自分という自己中心性	保健師との距離の取り方の不安定さ
	産後の生活に不適応	インターネット情報への依存
	情報を処理しきれず助長される不安	情報を処理しきれず助長される不安
	要支援にもかかわらず無自覚	相談機関への抵抗感
	結果が大事な育児	育児経験や育児能力の不足
	些細なことで不安定になる育児	緩和されない次々に出現する不安
	現実の育児に対応しきれずパニック	産後の生活を思い通りにしようとする固着
	理想像とのギャップのある育児	対応できない予想外の育児
	産後の生活に対応しきれずパニック	現実の育児に対応しきれずパニック

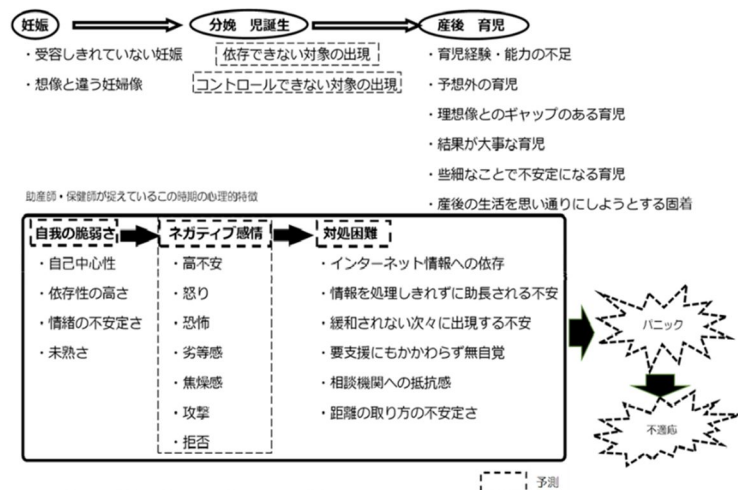


図3 助産師・保健師がとらえる妊産褥婦の心理的特徴

(3) 助産師らとのディスカッションを通して捉えた妊産褥婦へのかかわり方の方向性

研究報告会を Web 会議にて開催し、病院に勤務している助産師や地域の母子保健センター等

にて産後の戸別訪問事業等に携わっている助産師・保健師と2回にわたってグループディスカッションを行い、意見交換を実施した。

まず助産師・保健師とのディスカッションを開催し、これまで妊娠期から産後3か月までの間の妊産褥婦を対象に実施してきた母性心理質問紙や心理指標、対児感情、母子画や円環家族イメージ画の描画特徴等母性心理学の研究結果(1)を含む)について、さらに助産師・保健師に実施した半構造化面接から得られた内容(2)の結果)から、現代の妊産褥婦の特徴について報告し、それらを踏まえて、助産師・保健師がとらえている現場での妊産褥婦像について意見を交わ

した。ここでは、情緒の不安定さ等を抱える「気になる」褥婦に対して退院までに対応できないと悩む助産師やコロナ禍であるという状況もあって、忙しすぎてきめ細かな対応ができないと感じている保健師からの声が多く出され、母親へのケアに対して助産師・保健師が不全感を抱えていることが語られた。周産期の臨床現場ではハイリスクの妊産褥婦への産後うつ病のスクリーニングはほとんどのところで実施され、手厚いケアが行われている。しかし助産師らが指摘しているいわゆるグレーゾーンの「気になる」妊産褥婦は、「評価されるのが怖い」「価値をつけられ

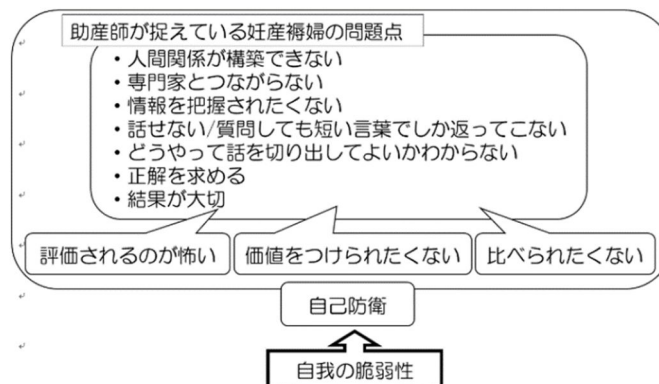


図4 助産師とのディスカッションから見えてきた妊産褥婦

られたい」「比べられたい」という自己防衛をしていると予測された(図4)。

助産師とのディスカッションの中では、妊産褥婦の中から育児期に対処困難に陥る可能性がある「気になる」妊産褥婦を見出すには、妊産褥婦の心理的様相を捉える必要があるという意見で一致した。これまで行われてきた両親教室等の集団指導の中では集団でのメリットをもちやすかすことは困難であり、集団指導の後にそれぞれが同じようなことで個別に相談にくる妊婦が多い現状も語られた。また、なにか気になることや相談したいことがあっても、インターネット上の情報発信元の不確かな情報を拾って一喜一憂するのみにとどまってしまう、声をかけても専門家である助産師のところから自ら相談に来ることができない母親たちの姿についても共有された。それは助産師から見ると、母親自身、問題が生じて躓いているにもかかわらず、悩んでいるという自覚を持たず、自分が傷つかないようにしているため、助産師側も踏み込んだ対応ができずに信頼関係が築けない、というものであった。その状況を打破するべく、産院の助産師が妊娠期から何かあればいつでも来るよう繰り返し声をかけ続け、出産後は気になる母親のもとに自ら家庭訪問を頻回に実施して、母親が困っている子育ての現場に直接赴いて指導をしているが、それでも2割程度はそこから零れ落ちてしまうという事例も報告された。

このようにしてみると妊産褥婦の自我の脆弱性や自身の問題への無自覚さが育児困難感を引き起こし、心理的な「育てにくさ」の本質につながるのではないかを考えられる。インターネットという仮想空間ではなく、いかにして現実の生活の中で相談できる専門家につなげることができるかが重要である。それには妊娠期からいかに母親たちとの関係性を構築できるか、助産師だけでなく、多職種が連携して関わっていく必要がある。助産師や保健師が感じている対応の困難さが妊産褥婦の自我の脆弱性によるものであれば、育てにくさを抱えた今の妊産褥婦の心理的様相を心理職が看護職と連携し、生活の場でのサポートにかかわっていくことで妊産褥婦への理解とケアに役立つものと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 櫻井薫・和田佳子・河野千佳・横田正夫
2. 発表標題 妊娠期および産褥期における色彩円環家族イメージ画のイメージ円の大きさの特徴
3. 学会等名 第49 回日本女性心身医学会学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 和田佳子・櫻井薫・河野千佳
2. 発表標題 育児期における色彩円環家族イメージ画の包摂と描線の特徴
3. 学会等名 第20回日本ウーマンズヘルス学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 櫻井薫・和田佳子・河野千佳
2. 発表標題 妊娠期及び産褥期における色彩円環家族イメージ画の包節と描画の特徴
3. 学会等名 第19回日本ウーマンズヘルス学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 和田佳子・櫻井薫・河野千佳
2. 発表標題 褥婦における色彩円環家族イメージ画の特徴
3. 学会等名 第18回ウーマンズヘルス学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河野千佳・和田佳子・櫻井薫・横田正夫
2. 発表標題 助産師・保健師がとらえる妊婦・褥婦の心理的特徴
3. 学会等名 日本応用心理学会第89回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 櫻井薫・和田佳子・河野千佳・横田正夫
2. 発表標題 産褥早期の色彩円環家族イメージ画の描線の形態と心理指標との関連
3. 学会等名 第60回日本母性衛生学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 櫻井薫・和田佳子・河野千佳
2. 発表標題 妊婦における色彩円環イメージ画の特徴
3. 学会等名 第17回日本ウーマンズヘルス学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 櫻井薫・和田佳子・河野千佳・横田正夫
2. 発表標題 妊娠期の色彩円環家族イメージ画の特徴と産後1か月・産後3か月の産後うつ傾向との関連
3. 学会等名 第59回日本母性衛生学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河野千佳・和田佳子・櫻井薫・横田正夫
2. 発表標題 対児感情評定尺度の形容詞項目の検討
3. 学会等名 第58回日本母性衛生学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 櫻井薫・和田佳子・河野千佳・横田正夫
2. 発表標題 妊娠期の色彩円環家族イメージ画の描線の特徴と産後うつとの関連
3. 学会等名 第58回日本母性衛生学会学術集会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	和田 佳子 (WADA Keiko) (50293478)	聖徳大学・看護学部・教授 (32517)	
研究分担者	櫻井 薫 (SAKURAI Kaoru) (80779744)	防衛医科大学校(医学教育部医学科進学課程及び専門課程、動物実験施設、共同利用研究施設、病院並びに防衛・その他・助教 (82406)	
研究分担者	横田 正夫 (YOKOTA Masao) (20240195)	日本大学・文理学部・教授 (32665)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------